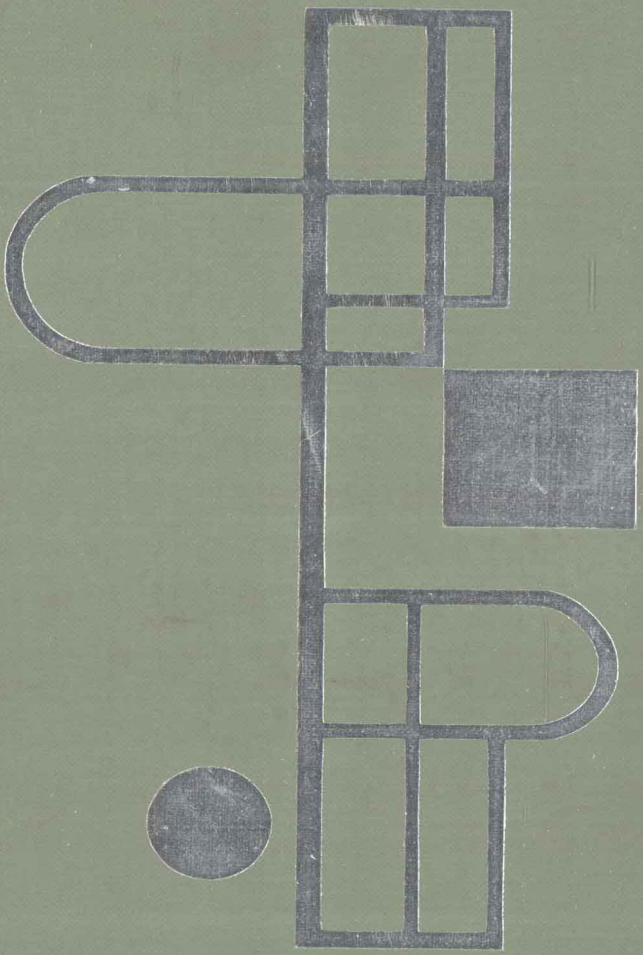
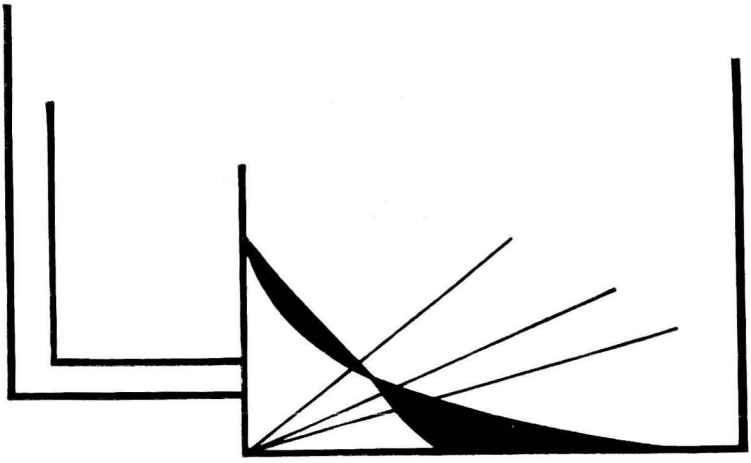


川端康成集

新選 現代日本文學全集
3



筑摩書房版

新選 現代日本文學全集 3

川端康成集

昭和三十三年十月十五日 発行

著者 川端康成

発行者 東京都千代田区神田小川町二ノ八 古田晁

印刷者 東京都青梅市根ケ布三八五 山田一雄

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八 筑摩書房

電話 東京(29)二九局七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

製本 株式会社鈴木製本所
印刷 株式会社精興社
整版 株式会社精興社

川端康成集　目次

舞　姫……五
日も月も……八八
みづうみ……一五四
女であること……二〇一
北の海から……三八二
白　雪……三八八
水　月……三九九
並　木……四〇四
永遠の旅人……三島由紀夫　四一〇
解　説……高見　順　四一六

装幀　恩地孝四郎
　　恩地邦郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

川端康成集

舞　姫

皇居の堀

東京の日の入りは四時半ごろ、十一月のなかばである……。

タクシイがいやな音を立ててとまると、うしろから煙をふき出した。

晨の俵とまきの袋とを、うしろにつけた車だ。ゆがんだ古バケツもぶらさげてゐる。

あとの車の警笛に振り向いて、

「こはい。こはいわ。」

と、波子は肩をすくめると、竹原に寄り添つた。

そして、顔をかくさうとするかのやうに、手を胸まであげた。

竹原はその波子の指先がふるへてゐるのにおどろいた。

「なにが……？　なにがこはいんです。」

「見つかるわ。見つかりさうですわ。」

「ああ……。」

さうかと思つて、竹原は波子を見た。

日比谷公園の裏から皇居前の広場にはいる、交叉点のまんなかで、車のゆききの多い道だし、ゆききの多い引け時だから、二人の車のうしろに二三台とまり、左右を流れる車がつづいた。

うしろにつかへた車がバックすると、その明りが二人の車にさしこんだ。波子の胸の宝石がきらめいた。

波子は黒いスウツの左の胸に、ブロオチをつけてゐた。細長いぶだうの形で、つるは白金、葉は青いくすんだ石、それに幾粒かのダイヤの実があつた。

首飾りに合はせて、真珠の耳飾りもつけてゐた。

しかし、耳の真珠は髪の毛に見えかくれするほどだつた。首の真珠も、白いブラウスのレエスの飾りで、あまり目立たなかつた。レエスは白と思へるが、薄く真珠色なのかもしれない。

そのレエスの飾りは、胸の下の方まであつたが、やはらかくいいもので、むしろ年齢の気品を添へてゐた。

さうしておなじレエスのえりが、立てたといふほど高くはなく、耳の下あたりからフリルを取つて、そのひだは前へ来るにつれて、円みが深まつてゐる。細い首にやさしい波がゆらめいてゐるやうだ。

薄明りのなかで、波子の胸の宝石のきらめきも、竹原に訴へるやうだつた。

「見つかるつて、こんなところで、だれに見つかるんです。」

「矢木にだつて……。それから、高男にだつて……。高男はお父さん子ですから、私を見張つてますのよ。」

「御主人は京都ぢやありませんか。」

「わかりませんわ。それに、いつ帰るかしれないわ。」

と、波子は首を振つて、

「竹原さんがこんな車に乗せるからよ。竹原さんは昔から、こんなことばかりなさつてるのよ。」

しかし、車はいやな音をひきずつて動き出した。

「ああ、動いた。」

と、波子はつぶやいた。

交叉点の真中で煙を吐いた車を、交通巡査も見てゐたが、とがめには来なかつたから、とまつてゐたのは、ほんの短い時間だつたらう。

波子は恐怖がほほに残つてゐるかのやうに、左手をほほにあてた。

「こんな車に乗せたつて、しかられたが……。」

と、竹原は言つた。

「人をかきわけて逃げるやうに、公会堂を出て、波子さんが、そはそはしてるからですよ。」

「さう？　自分では気がつかなかつたけれど、さうかもしれませんわ。」

波子はうつ向いた。

「今日だつて、うちを出るときに、ふつと指輪を二つはめてみたりするんですの。」

「指輪？」

「さう。主人の財産ですから……。もし主人に出会つたら、宝石がまだある、自分の留守中になくならなかつたと思つて、矢木はよろこび……。」

と、波子が言ふ時に、また車はいやな音をさせてとまつた。

こんどは運転手がおりて行つた。

竹原は波子の指輪を見ながら、

「矢木さんに見つかつた時の用心に、宝石をつけてらしたんですか。」

「さう、はつきりぢやなく……、ただふつと。」

「おどろいたもんだ。」

しかし、波子は竹原の声も聞えぬかのやうに、

「いやですわ、この車……。悪いことがあるわ。こはいわ。」

「ひどい煙を出してますね。」

と、竹原もうしろの窓を見て、

「かまのふたをあけて、火をおこすらしい。」

「地獄の車ですわ。おりて歩いてはいけませんの？」

「とにかく出ませうか。」

竹原はあけにくいとびらをあけた。

皇居前の広場へ渡る、堀の上であつた。

竹原は運転手のところに行つて、波子を振り向いた。

「お帰り、いそぎますか。」

「いいえ、よろしいんですの。」

運転手は長い古鉄の棒を、かまの腹につつこんで、がちやがちやまはしてゐた。火を屁ぐものだらう。

波子は人目をさけるやうに、堀の水を見おろしてゐたが、竹原が近づくと、

「今夜はうちに品子がひとりだと思ひますの。あの子は、私の帰りがおそいと、どうしてた、どこへ行つて来たと聞いて、少し涙ぐみさうになつたりしますけれど、心配して言ふだけで、高男のやうに、私を見張つてるわけぢやありませんわ。」

「さうですか。しかし、今の宝石のお話ね、おどろきましたね。宝石はもとからあなたのものだし、やはりこれまで通りに、おうちの暮しのことは、一切あなたの力でやつて来てるんでせう。」

「さうですわ。力はありませんけれど……。」

「あきれた話だ。」

と、竹原は波子の力ない姿をながめて、

「ぼくには、御主人の気持が不可解ですよ。」

「矢木家の家風ですわ。結婚した時から、一日も変らない、習はしですもの。竹原さんも、昔からよく、ごぞんじぢやありませんか。」

波子は言ひつづけた。

「結婚前からかもしれませんよ。主人の母の代からの……。母は矢木の父に早く死に別れて、女手ひとつで、矢木を学校へあげて来たんですから。」

「それとは、わけがちがひますよ。また、あなたの、いはば持参金で、楽に暮してゐられた戦争前とは、わけがちがふでせう。矢木さんにも、わかり過ぎてるはずだ。」

「わかつてますわ。でも、人間はそれぞれ悲しみを、背負つてゐますからね。矢木がさういふんですの。悲しみがあまり重いと、そのほかのことでは、知つてゐてわからないこと、どうしやうもないことも、出来て来ますわ。それは私もおたがひに、さうだと思ひますの。」

「ばからしい。矢木さんの悲しみは、なんだか知らんが……。」

「日本が敗けて、矢木の心の美がほろんだと、いふんですの。自分は古い日本の亡霊だ……。」

「ふうん。その亡霊の世迷言で、波子さんの所帯の苦労を、見て見ぬ振りしようといふ……？」

「見ぬ振りどころぢやありませんの。物の減つてゆくのが、矢木は不安でしかたがないの。ですから、私のやり方を監視してゐるのよ。こまかいお金に、いちいち苦情を言ふのよ。なにもなくなつた時に、矢木は自殺するつもりぢやないかと思つて、私はこはいんですの。」

竹原も少し寒けがした。

「それで、指輪を二つ、はめて出られたわけですか……。矢木さんは亡霊どころぢやないでせうが、波子さんはなにか亡霊につかれてゐるかもしれませんね。しかし、お父さんの卑怯な態度を、お父さん子の高男さんは、どう見ていらつしやるんですか。もう子供ぢやないでせう。」

「ええ。悩んでゐるやうですわ。その点では、

私に同情してますの。私の働いてゐるのを見て、学校をやめて働くつて言ひますけれど、あの子は、父を学者として、絶対に敬ひ通して来た子ですから、もし父を疑ひ出すと、どうなりますか、おそろしいですわ。でも、こんな話、こんなところで、もう……。」

「さう。いづれ落ちついて聞きませう。しかし、あなたが今のやうに、矢木さんをこはがるのは、見るにしのびないな。」

「すみません、もういいの。ときどき、恐怖の発作が起きるんですわ。てんかんか、ヒステリイみたい……。」

「さうですか？」

竹原は疑はしげに言つた。

「ほんたう。車のとまつたのが、いけないのよ。もうなんともありません。」

と、波子は顔をあげて、

「きれいな夕やけですわ。」

その空の色は、首飾りの真珠にも、うつるやうであつた。

午前は晴れて、午後は薄雲の出る日が、二三日つづいてゐた。

ほんとに薄い雲で、入日の西空は、雲が夕もやに溶けこんでゐた。しかし、もやの夕やけに微妙な色合ひのあるのは、雲のせゐらしかつた。

夕やけ空は煙るやうに垂れて、昼間の温かさを、ぽうつと甘くつつんでゐたが、そのなかにもう秋の夜冷えが、すうつと通りはじめてゐた。夕やけのあかね色も、ちやうどそんな感じだつた。

あかね色の空は、濃く朱がかつたところもあり、薄く紅がかつたところもあり、それに薄紫や薄ある色のところも、少しあつた。もつとほかの色もあつて、夕もやのなかに溶けあひ、じつと垂れてゐるやうに見えながら、色は早く移つてゆき、消えてゆきさうであつた。

そして、皇居の森の木末に、一筋のリボンのやうに、青い空が細く残つてゐた。

その青い空には、夕やけの色がみぢんもうつつてゐない。黒く沈んだ森と赤くよどんだ夕やけとのあひだに、あざやかな切れ目を描いて、その細い青空は遠くに見え、静かに澄んで、かなしいやうであつた。

「きれいな夕やけですね。」

と、竹原も言つたが、波子の言葉をくりかへしたに過ぎない。

竹原は波子が気がかりで、夕やけはこんなものだと思つただけだ。

波子は空を見つづけてゐた。

「これから冬にかけて、夕やけが多いですわ。子供のころを思ひ出すやうな、夕やけぢやありませんの？」

「さう……。」

「冬の寒いのに、表で夕やけを見てゐて、かぜをひくからつて、しかられたものですわ。ああ……、私ね、夕やけをじつと見てゐたりするのも、矢木の感化かしらと、思ふことがありますけれど、子供の時から、さうでしたのね。」

と、波子は竹原を振り向いて、

「でも、やはり、妙なところがあるわ。さつき、日比谷の公会堂へはいる前にも、いてふの木が四五本、公園の出口にも、いてふが四五本ありましたでせう。同じくらゐの木がならんで立つてゐながら、黄ばみ加減が木によつてちがひますし、葉の多く落ちたのや、少く落ちた木がありましたでせう。こんな風に、木にもそれぞれの運命があるのかしら……。」

竹原はだまつてゐた。

「いてふの木の運命を、ぼんやり考へてる時に、車ががたがたととまつたのよ。びつくりして、こはくなりましたの。」

と、波子は車を見た。

「直りさうにないわ。待つにしても、そばに立つてると人が見るから、向う側にいきませう。」

竹原は運転手にことわつて、金を払ひながら振りかへると、波子はもう道を横切つてゐた。明るく若い後姿だ。

向うの堀の突きあたりの正面、マッカアサア司令部の屋上に、つい今まで、アメリカの国旗と国際連合の旗とが、あつたと思ふのに、なくなつてゐた。ちやうど旗をしまふ時間なのだらう。

そして、司令部の上の東の空は、夕やけがなくて、薄雲が高く散つてゐた。

波子の感情が動きやすいのを、知つてゐる竹

原は、きびきびした後姿を見て、波子が自分で言ふやうに、「恐怖の発作」は消えたのだらうかと思つた。

竹原も向う側に渡ると、

「車の流れを、あざやかに横切りますね。やはりさすがに、踊りの呼吸ですか。」

と、軽く言つた。

「さうでせう。からかつてらつしやるの？」

そして、波子は少しためらふやうに、

「私も一つだけ、からかつていいかしら……？」

「ぼくをね？」

波子はうなづいて、うつむいた。

司令部の白い壁が、真正面から、堀にうつつてゐた。その窓の燈もうつつてゐた。

しかし、建物の白い影はうすれて、かうしてゐるまに、燈の影だけが、水の上に残りさうであつた。

「竹原さん、あなたはおしあはせですか。」

と、波子はつぶやいた。

竹原が振り向いて、だまつてゐると、波子は顔を赤らめた。

「もう今は、私に、さうおつしやつて下さらないの？　昔、なん度もさう聞いて下さつたわ。」

「さう、二十年前にね。」

「二十年ほど、聞いて下さらないから、今度は、私が聞いてさしあげますわ。」

「それで、ぼくをからかつたことに……？」

と、竹原は笑つて、

「今は聞かなくても、わかつてゐますから。」

「昔はおわかりにならなかつたの？」

「それもまあ、わかつてゐたから、聞いたやうなものですね。幸福な人に、あなたは幸福かと、聞くことはないでせう。」

と言ひながら、竹原は皇居の方へ歩き出した。

「波子さんの結婚が、ぼくはまちがつてゐると思つたから、結婚前にも、結婚なさつてからも、聞いたわけですよ。」

波子はうなづいた。

「しかし、あれはいつでした。スペインの女の舞踊家が来た時ね、結婚なさつてから、五年目ぐらゐですか。日比谷公会堂で、偶然お会ひしたことがありましたね。波子さんの席は、二階の前の方の招待席、あなたのバレエの仲間がゐるし、御主人がいつしよだつた。ぼくはうしろの方の席で、かくれるやうにしてたんです。ところが、波子さんはぼくを見つけると、つかつか上つて来て、ぼくの隣りにすわつた。その席から動かない。御主人やお友だちに悪いから、元の席へおかへりなさいと言ふと、ただ、そばにすわらせておいてくれ、だまつておとなしくしてるから……。あなたはさう言つて、終りまで二時間ほど、隣りの席にじつとしてたでせう。」

「さうでしたわ。」

「ぼくはおどろいたな。矢木さんが気にして、ときどきこつちを見上げても、あなたは下りてゆかない。あの時、ぼくは迷つたんですよ。」

波子は一足後れるやうに、ふと立ちどまつた。

皇居前広場の入口で、立札が竹原の目について、

（この公園はみなさんの公園です。きれいな公園にしておきませう。……）

「ここも、公園ですか。公園といふことに、なつたんですか。」

厚生省国立公園部の立札を読んで、竹原は言つた。

波子は広場の遠くを見た。

「うちの高男や品子も、戦争中、小さい中学生女学生で、ここへ、土運びや草取りに、学校から通つたんですよ。宮城前へ行くといふと、矢木は子供たちに、体を冷水で清めさせてましたわ。」

「あのころの矢木さんなら、さうでせうな。その宮城も今は、宮城と言はないで、皇居といふやうですね。」

皇居の上の夕やけは、おほかた薄れて、灰色がひろがり、かへつて逆の東の空に、昼の明りが残つてゐた。

しかし、皇居の森をふち取るやうな、細い青空は、まだ消えなかつた。鉛色を帯びて、なほ深まつてゐた。

森の小高い松が三四本、その細い空を抜け出て、夕やけのなごりのなかに、松の姿を黒く描いてゐた。

波子は歩きながら、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

「日の暮れるのが早いわ。日比谷公園を出る時は、議事堂の塔が桃色に染まつてましたわ。」

その国会議事堂は、もう夕やみにつつまれて、上に赤い燈が点滅してゐた。

右手の空軍司令部や総司令部の屋上にも、同じ赤い燈が点滅してゐた。

総司令部の窓明りは、堀の土手の松越しにも、きらめいて見えたが、その松の下に、あひびきの人影が薄暗く、幾組も見えた。

波子はためらふやうに、足をとめた。さむざむとした、あひびきの影絵が、竹原も目についた。

「さびしいから、向うの道へまはりませう。」

波子が言つて、二人は引き返した。

あひびきの人影を見て、自分たちも、あひびきの形で歩いてゐることに、二人とも気づいたわけだ。

竹原は波子を東京駅へ送る途中、車が故障したから、歩いてゐるのだが、日比谷公会堂の音楽会に、波子が電話で誘ひ出したのだから、はじめからあひびきにちがひない。

しかし、二人とも四十を過ぎてゐた。

過去を語ることが、愛情を語ることにもなつた。波子の身の上相談も、愛の訴へに聞えた。それだけの年月が、二人のあひだに流れてゐた。この年月は、二人のつながりでもあり、へだてでもあつた。

「迷つたつて、おつしやつたの、なにをお迷ひになつたの？」

と、波子は話をもどして聞いた。

「さう、あの時ね……。ぼくは若かつたから、あなたの心理の、判断に迷つたんですよ。矢木さんをほつといて、ぼくのそばにすわり通すのは、ずゐぶん大胆不敵な行動ですからね。こんな思ひきつたことを、波子さんがどうしてするのか。考へてみると、あなたは前から、激しい感情を出して、人をおどろかせる時があつた。それかと思つたんです。さうにはちがひなかつたんでせうが……。」

「さつき、波子さんは自分で、発作と言つたが、あの時もさつきも、もし感情の発作だつたとすると、大変なちがひですね。あの時、そこにゐる御主人を、無視したやうな人が、今日は、京都にゐるはずの御主人を、あんなに恐怖するんだから……。」

竹原は言つた。

「あの時、そつと公会堂からつれ出して、二人で逃げてしまへば、よかつたんでせうか。ぼくはまだ結婚してゐなかつた。」

「でも、私はもう子供がありましたわ。」

「しかし、それよりも、波子さんの幸福などといふものに、ぼくもまちがつて、とらはれてゐたのかもしれませんね。あの時代の、ぼくの若さでは、いつたん結婚した女の幸福は、その結婚のなかでもとめるしかないと、信じさせられてゐて……。」

「今だつて、さうですわ。」

「さうですが、さうでもない。」

と、竹原は軽く、また強く言つて、

「しかし、あの時は、矢木さんのそばを離れて、ぼくのそばにいらしたのも、あなたの結婚が幸福で平和だから、出来るんだらう。矢木さんを信頼して、安心してゐるから、こんな感情のわがままが、ゆるされるんぢやないか。ぼくはさうも思つたんですよ。ただ、ぼくを見て、ふとなつかしくなつただけだ。ぼくのそばへ来ることに、あなたは矢木さんにたいして、やましいものを感じない。それにしても、じつとすわり通してゐるのは変だ。あなたはなにも言はない。ぼくはあなたの顔を、見てはいけないやうな気がして、横も向けなかつた。あの時、ぼくは迷つたんですよ。」

波子はだまつてゐた。

「矢木さんの外見も、僕を迷はせたんですね。あの通り、温厚な美男子で、あの人を見てゐると、奥さんが不幸だなんて、だれも想像がつきませんからね。幸福でなかつたら、奥さんが悪いと思はれる。今もさうでせう。あれは、をと年か、その前の年か、ぼくがお宅の離れを借りてゐたころ、いつか電燈代がないとかで、ぼくの月給袋を渡してあげると、あなたはぽろぽろ涙をこぼして、月給袋の封が切つてないと言ふ……。あなたは結婚してから、一度も、主人の月給を見たことがないと言ふ……。ぼくはおどろきましたが、その時たつて、あなたのこれまでのやり方が、悪かつたせゐたと、まづ思ひま

したからね。それほど、矢木さんは立派に見える。まして昔は、あなた方二人が通ると、人が振りかへつたものでせう。結婚の出発がまちがつてゐると、僕が思つても、おしあはせですかと聞くのは、自分の目を疑ふやうでね。波子さんが答へないのは、当然だとも思ひました。」

「竹原さんだつて、お答へなさらないぢやありませんの？」

「ぼくが？」

「ええ。さつき、私からお聞きしたはずよ。」

「ぼくらは平凡です。」

「平凡な結婚て、ありますの？　うそおつしやるのね。結婚はみんな、一つ一つ非凡のやうですわ。」

「しかし、ぼくは矢木さんのやうに、非凡人ぢやないから……。」

と、竹原は話をそらすやうに言つた。

「ちがひますわ。私の学校友だちを見てゐても、たいていさうですけれど、その人が非凡だから、結婚も非凡といふわけぢやなく、平凡な人が二人寄つても、結婚は非凡なものになりますのよ。」

「大いにね。」

「大いにね、が出たわ。いつからの口ぐせ……？　年寄りが人をはぐらかすやうで、いやぢやありませんの？」

波子はまゆをやはらかく上げて、竹原の顔をちよつとのぞくやうに、

「いつも、うちの話を聞かせるのは、私ばかりね。」

と、自分から、はぐらかされたことにした。

詰め寄つてみたい、もどかしさもあるが、竹原の家庭の話に、波子は踏みこんでゆけなかつた。

「まだ、あの車、動かないで、煙を出してますわ。」

と、波子は笑つた。

日比谷公園の上に、月が出てゐた。三日か四日の月であらうが、その弓の形は、どちらにも傾かないで、真直ぐ雲間に立つてゐた。

二人は堀の上に来てゐた。

水にうつる燈をながめて、立ちどまつた。

司令部の窓の燈で、真正面から、長い火影を、水にゆらめかせてゐた。右の岸の柳の並木と、左手の小高い石がけと、その上の松も、火影の横に、薄暗い影を落してゐた。

「今年の中秋名月は、九月の二十五日か六日ごろだつたでせう？」

と、波子は言つた。

「ここの写真が、新聞に出てましたわ。司令部の上の満月を写したの……。この火影もありました。窓の列だけ、水にも、光の条がうつつてるんですけれど、その上に一本出た光の影があつて、それが名月の影らしいんですの。」

「そのこまかいことを、新聞の写真で見たんですか。」

「ええ。絵葉書みたいな写真だけれど、私は、印象に残りましたの。お城のやうな石がけや松も写つてゐたから、そこの柳のあひだに、カメラをすゑたんでせうね。」

竹原は秋の夜気を感じて、波子をうながすやうに、歩き出しながらつぶやいた。

「あなたはお子さんにも、そんな話をするんですか。お子さんを弱くしますよ。」

「弱く……？　私だつて、さう弱いばかりでせうか。」

「品子さんも、舞台に出ると強いけれども、これから、お母さんに似ると困るな。」

堀を渡つて、左にまがつた。日比谷の方から、巡査の群が歩いて来た。皮帯のとめ金だけが光つて見えた。

波子は道をよけて、竹原によりそふと、腕につかまりさうにした。

「ですから、品子の力になつて、守つてやつていただきたいわ。」

「品子さんよりも、あなたは……？」

「私はいろいろもう、お力にすがつてるぢやありませんの？　日本橋に、おけいこ場を持てたのから、竹原さんのおかげですし……。それに今では、品子を守つてやつて下さるのが、私を守つていただくことになりますわ。」

波子は巡査の列をよけたまま、岸の柳寄りに歩いてゐた。

そのしだれ柳のこまかい葉は、まだほとんど散つてゐない。

しかし、電車線路の脇のすずかけの並木は、こちら側では、黄ばんだ葉があるのに、向う側のは、同じすずかけの葉が落ちつくして、すつかり裸木になつてゐた。公園の木かげになるからだらうか。よく見ると、こちらの並木にも、葉のおほかた散つた木や、まだ葉の青い木が、まざつてゐた。

竹原は波子の「木にもそれぞれの運命が……。」といふ言葉を思ひ出した。

「戦争がなかつたら、品子は今ごろ、イギリスかフランスのバレエ学校で、踊つてゐられたんでせうね。私もついて行けたかもしれませんわ。」

と、波子は言つた。

「あの子は、大切な勉強の年を、むだに過ごしてるのよ。取り返しがつかないわ。」

「品子さんは若いから、これからだつて……。しかし、波子さんも、さういふ脱出の方法を、考へてはゐたんですね。」

「脱出つて……？」

「結婚から脱出……。矢木さんを離れて、外国へのがれる……。」

「さあ、それは……？　私は品子のことばかり考へて、娘のために、生きるつもりでしたから……。今もさうですけれど……。」

「子供のなかへ逃げこんでしまふ、母親の脱出方法ですね。」

「さう？　でも、私のは、もつと激しいと思ひます。気ちがひじみてゐさうよ。品子がバレリーナになるのは、私の見果てぬ夢ですから……。品子が私ですわ。私たちは、私が品子のぎせいになつてゐるのか、品子を私がぎせいにしてゐるのか、ときどき、わからなくなりますの。どつちだつていいわ。そんなことを考へ出すと、自分たちの能力の限界が見えて来さうで、だめですもの。」

と、波子はなんとなく下を向いたが、

「あら。こひがゐますわ。白いこひがゐますわ。」

と、声を上げながら、堀をのぞきこんだ。顔や肩にしだれかかる、柳の枝を振りはらつた。

日比谷の交叉点まで来てゐて、堀も曲り角だつた。

曲り角の水のなかに、白いこひが一匹、じつとしてゐた。浮かぶでもなく、沈むでもなく、水のなかほどにゐた。曲り角のせゐで、ごみがたまつて、そこだけ浅い底が見えた。落葉も沈んでゐた。しかし、こひと同じやうに、水のなかほどに動かぬ、すずかけの落葉もあつた。波子が振りはらつた柳の葉が、水の表に散つてゐた。水は薄黄色くよどんでゐた。

司令部の窓明りで、竹原もこひをのぞきこんだが、すぐ後にさがると、波子のうしろ姿を、じつと見た。

波子の黒いスカアトは、すその方へきりつと細まつて、腰から脚の線が出てゐた。

青春の時から竹原が、波子の踊りにもそれを見て、胸のときめいた線だ。その女の線は、今も変らない。

しかし、そのやうな波子のうしろ姿が、夜の堀のこひなぞ、のぞきこんでゐるのを、竹原はなんといふことだと、たまらなくなつて来さうで、

「波子さん。そんなもの、いつまで見てるんです。」

と、きつく呼んだ。

「およしなさい。あなたはそんなもの、目につくのが、いかん。」

「どうしてですの。」

波子は振り向いて、柳の下から、歩道にもどつた。

「そんな小さいこひが、一匹ゐたつて、だれも見やしませんよ。それがあなたは、目につくんだから……。」

「だつてだれも見つけなくても、だれも知らなくても、このこひは、ここにかうしてゐるんですもの。」

「あなたはさういふ人だ。さびしさうな魚を、見つけたりするところのある……。」

「さうかもしれないわ。でも、広い堀のなかで、よりによつて、人通りの多い、曲り角のすみで、あんなにじつとしてるの、不思議ぢやありませんの？　通る人は気がつかないし、後でだれかに、このこひの話をしても、うそだと思ふでせう。」

「それは、目につく方が、どうかしてるんだか

ら……。波子さんに見られたくて、魚は来てゐたのかもしれない。孤独の身の、同病相哀れむでね。」
「さう。こひのゐる向うの、堀の真中に、魚を愛しませう、と立札が見えますわ。」
「ほう、それはいい。波子を愛しませう、と書いてはありませんか。」
と、竹原は笑つて、立札をさがすやうに、堀の水を見た。波子も笑ひながら、
「あすこよ。あなたは立札も、目につかないの？」
二人の横に、アメリカの軍用バスが来て、アメリカの男女が乗りこんだ。
歩道のわきにも、アメリカの新型の車が、ずうつと一列においてあつたが、つぎつぎに動き出してゐた。
「こんなところで、あはれな魚を見たりして、あなたはだめですよ。」
と、竹原はまた言つた。
「あなたのさう言ふ性格を、もう捨てるんですね。」
「さうね。品子のためにね。」
「波子さん自身のためにも……。」
波子はしばらくだまつてゐてから、落ちついて言つた。
「品子のためばかりでもありませんけれど、うちの離れを売ることにしましたのよ。竹原さんにお貸ししてゐた離れですから、その前に、ちよつと、お話しておきたいと思つて……。」
「さうですか。ぼくが買ひませうか。その方が、もしもですよ、後で母屋もお売りになりたいやうな場合に、都合がよろしいかもしれませんね。」
「まあ？　竹原さんは、そんな判断が、とつさに、お浮かびになりますの？」
「これは失礼しました。」
と、竹原はあやまるやうに、
「つい失礼な先まはりをしちやつて……。」
「いいえ。それはもうおつしやる通りに、いづれは、母屋も売ることになりますわ。」
「さうなつた時に、母屋の買手は、離れにどんな人が住んでるか、必ず気にしますよ。離れと言つても、屋敷うちで、話声が聞えるほどだから、後では、母屋が売りにくいかもしれません。ぼくが離れを買つとけば、母屋が売れる時に、いつしよにゆづつてもいいし……。」
「はあ……。」
「しかし、離れを売るくらゐなら、四谷見附の焼跡を、お売りになつたらいかがです。へいだけ残つて、草が生えてるんでせう。」
「ええ、でも、あすこには、品子の舞踊研究所を建ててやりたいんですの、将来……。」
建つみこみはなささうだ、と竹原は言ひかかつたが、
「なにもあすこに限らないでせう。建てる時は、もつといい場所が、見つかりますよ。」
「さうでせうけれど、あの土地には、私と品子の舞踊の夢が、こもつてゐるんですもの。私の若い時、品子の幼い時からの、踊りの精が、あすこにゐますの。あすこには、いろんな踊りの幻がいつも私に見えてゐますの。あの土地を、人手に渡せないわ。」
「さう……？　それぢやあ、離れを切り売りなどしないで、いつそこの際、北鎌倉の家屋敷を、まとめて売りはらつちやつて、四谷見附に研究所つきの家を、お建てになつたら……？　これは出来さうだ。ぼくも仕事が、今の調子だと、少しならお助けしますよ。」
「主人が、たうてい、ゆるしてくれませんわ。」
「しかし、そこは波子さんの決心でせう。さういふ思ひ切りをよくしないと、よういに、研究所は建ちませんよ。今がその機会だと、ぼくは思ふな。竹の子ぐらしでは、なにも残らない。相当の研究所を、今お建てになつとけば、いいけいこ場がなくて困る人が、多いといふ話だから、ほかの舞踊家にも使つてもらつて、それが品子さんの役に立つんぢやありませんか。」
「ゆるされないことですわ。」
波子は力なく言つた。
「矢木に話しても、ふうむ、と例によつて、考へ深さうにするだけですわ。前には、ほんたうに考へ深い人だと、思つたんですけれど、ふうむ、さう……？　と、もつともらしく見せておいて、そのあひだに、打算するんですわ。」
「まさか……。」
「さうだと思ふわ。」

竹原は波子を振り向いた。波子は目を見合つたまま、
「でも、私には、竹原さんも不思議なのよ。私が何を相談しても、即座に判断を下して、お迷ひになつたことがないんですもの。」
「さうですかね。あなたにたいして打算がないか、ぼくが俗人になつたかでせう。」
波子は目を、竹原の顔から、はなさなかつた。
「でも、竹原さんは、うちの離れをお買ひになつて、どうなさるつもり……？」
「どうしますかね。それはまだ考へてゐなかつた。」
そして、竹原はじやうだんめかしく、
「ぼくは矢木さんに、あの離れから、ていよく追ひ出されたやうなものだから、もしぼくが買つたら、あすこに乗りこんで、矢木さんに報復しますかな。しかし、矢木さんは、ぼくにはお売りにならんでせう。」
「そこが矢木のことですから、そろばんをはじいて、案外お売りするかもしれませんわ。」
「矢木さんは、そろばんをはじいたことが、ないぢやありませんか。そろばんは終始、波子さんの役目でせう。」
「さうね。」
「しかし、あなたの言ふ通りに、矢木さんは、ぼくでもいいかもしれんな。しつとといふものを、夢にも顔色に出さない紳士なんだから……。ぼくに売らないと言ふと、やきもちかと思はれるのが、矢木さんはおいやでせう。だけど、あなた方のあひだには、いつたい、しつとがあるのかないのか、おたがひに、それらしい気ぶりを見せないのは、はた目には、なにか不気味ですね。嵐の前の静けさのやうにも思へるし……。」
波子はだまつてゐたが、胸の底に、冷たい炎がふるへた。
「ぼくは深いたくらみがあつて、お宅の離れを買はうと言つたわけぢやないが、あの離れに、ときどきあらはれて、矢木さんの目ざはりになるのも、おもしろいですね。矢木さんの君子づらを、一皮むいてみたい……。でも、矢木さんのしつとよりも先きに、波子さんを苦しめることになりさうだ。さういふぼくだつて、今度また、お二人のそばにゐるのは、心が平らかでないでせうね。」
「竹原さんがどこにいらしたつて、私の苦しいのは同じよ。」
「ぼくのための苦しみ……？」
「それもあるわ。ほかの苦しみもあるわ。家を売つて、舞踊の研究所を建てるといふ、今のお話にしたつて、娘のためにはいいけれど、高男はどうなりますの。高男は模倣性の強い子で、だんだん父親の真似をして来ますの。それも高男の身になれば、無理もないかもしれませんわ。私が品子のバレエにばかり肩を入れて、高男は姉の陰になりがちですから……。」
「さうですね。気をつけないといけませんね。」
「またおまけに、マネエジャアの沼田が、私たち四人の離間策を、しつつこくやつてますのよ。私と品子のあひだまでね……。私たちを離れ離れにさせて、私をおもちやにして、品子を食ひものにしようといふのでせう。」
そこの岸の柳のあひだに、また、
（魚を愛しませう。）
といふ立札があつた。司令部のまん前で、窓の燈が強く明るいせゐか、向う岸の松影も、こちらの柳の並木の影も、ここだけは堀の水に、少しはつきりと見えた。
窓明りは向う岸の石がけの角まで、ほのかにうつつてゐた。その石がけの上に、あひびきの男の煙草の火があつた。
「こはい。あの、今通つた車に、矢木が乗つて……？」
と、波子はまた不意に肩をすくめた。

母の子父の子

矢木元男は、息子の高男をつれて、上野の博物館を出た。
石造りの玄関の真中で、父は立ちどまつた。古美術を見つかれた目に、ほうつと公園の木々がうつつて、なんとなくたたずむといふ風だ。古美術が頭に残つてゐて、自然が目新しく感じられるといふ風だ。
父は楽に口もとをゆるめて、公園をながめてゐた。高男はその父を、横からながめてゐた。

よく似た親子だが、息子は父よりも少し低くて、やせ形だつた。

二十日ばかり見なかつた父を、息子は立派だと思つてながめてゐた。

二人は彫刻の陳列室で、出会つたのだつた。

矢木が二階からおりて、彫刻の室にはいつて行くと、興福寺の沙羅羅像の前に、高男が立つてゐたのだつた。

矢木が近づくまでに、高男は振りかへつて、父を見つけると、少し気まり悪さうな顔をした。

「お帰りなさい。」

「ああ、ただいま。」

と、矢木はうなづいたが、

「しかし、どうしたんだい。思ひがけないところで会つたね。」

「迎へに来たんですよ。」

「迎へに……？　よくここだとわかつたね。」

「博物館の人といつしよに、夜汽車で帰るといふお手紙でしたから、多分、うちへ真直ぐお帰りにならないで、博物館にお寄りになつたんだらうと思つたんです。午前中は、家で待つてたんですが……。」

「さうか。それはありがたう。手紙はいつ着いた。」

「今朝……。」

「ちやうど間に合つた？」

「しかし、姉さんもけいこ日で、お母さんと出かけた後でしたから、二人とも、今日、お父さんがお帰りだといふことは知らないんです。」

「さうか。」

二人は顔を見合はせるのを避けるやうに、沙羅羅の像を見た。

「お父さんが博物館へいらしたんだらうと、見当はついても、どこでつかまへられるか、ぼくは考へましてね。」

と、高男は言つた。

「ここの沙羅羅や須菩提の前で、待つことにしたんです。いい考へでせう。」

「ふうむ。いい考へだ。」

「お父さんは、博物館へいらつしやると、いつも出る前に、この興福寺の須菩提と沙羅羅のところへ、必ず来て、しばらくお立ちになるでせう。」

「さう。頭がいつぺんに、すうつとするからね。心の曇りやにごりが、素直に清められる。しかも、いろんなつかれやこりが取れたやうに、なんとも言へぬ温い感じを受けるんだな。」

「ぼくは見てゐて、子供顔の沙羅羅が、まゆの根を寄せた感じは、姉さんやお母さんのくせに、ちよつと似てるんぢやありませんか。」

父は首を振つた。

とんでもないといふ風に、矢木は首を振つたのだが、すぐ顔色をやはらげた。

「さうかね。とにかく高男が、お母さんや品子を、天平時代の仏に、なにか似てゐると感じたのは、たいしたことだね。二人に話してやつたら、あの人たちも、少しはやさしくなるよ。しかし、沙羅羅は女ぢやない。女にこんな顔はないだらう。沙羅羅は少年だよ。東洋の聖少年だ。りりしく立つてゐる。天平の奈良の都には、こんな少年がゐたやうに思へるね。須菩提も同じだ。」

「ええ。」

と、高男はうなづいて、

「ぼくはお父さんを待つて、沙羅羅や須菩提の前に、長いこと立つてゐるうちに、少しかなしく見えて来たんですが……。」

「ふむ。二つとも乾漆の像で、乾漆といふ彫刻の素材は、仏師が抒情的に扱ひやすいのかね。天真な少年像に、日本の哀愁も出てゐる。」

「姉さんも、よく動く上まぶたに、ときどきまゆをひそめて、これと似たやうな、かなしい目つきをしますよ。」

「さう。しかし、まゆの根を寄せるのは、仏像の作法の一つでね。この沙羅羅の仲間の、八部衆の、阿修羅の像や、須菩提と同じ、釈迦の十大弟子の像のうちの、いくつかも、やはりまゆをひそめてるよ。それに、この沙羅羅は、かれんな童形に造つてあるが、八大竜王の一つで、実は竜なんだ。仏法を護持する、おそろしい力がある。水の王だ。この像にも、さういふ力がこもつてゐる。肩にまつはつたへびが、少年の頭の上に、かま首を持ち上げてゐるだらう。しかし、いかにも人間らしい作りで、心やすく親しめるから、だれかに似てさうに思ふんだな。ところが、かう写実と見えて、永遠の理想の象

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com